

# 個性を大切に～ひとつひとつの積み重ね～



一二三恵美

大分大学・全学研究推進機構  
教授, 工学博士,  
専門は抗体工学.

一大決心で押し入れを片付けていて、思いがけず懐かしいものが出てきた。医療短大を卒業したときに、クラスメートと10年後の再開を約束してタイムカプセルに入れた寄せ書きである。お題は10年後の自分へのメッセージ。私の私へのメッセージは「家庭に入ってちゃんと子育てしていますか?」であった。

子供の頃、家族の在り方としては「父親は外で働き、母親が家を守る」という考え方が一般的だった。女性が正社員として働くことのできる職種は少なく、子育てを終えた後の再就職に苦労している母世代を見て育った。ところが、我が家は事情が違った。母は看護師で妹の出産と同時に家庭に入り、私が小学5年のときに仕事に復帰して救急指定病院で働き始めた。パート雇用からすぐに常勤になり、救急車が入ると定時には帰宅できず、休日勤務や当直も担当するようになった。と同時に、母が居ないときの家事は私の仕事になり、この生活は母が勤務先が変わるまでの十数年間続いた。

高校生になって進路を考えると、女性が働くには資格が必要だという強い思いがあった。医療分野に目が向いたのも看護学科を選ばなかったのも母の影響で、山口大学医療技術短期大学部・衛生技術学科に進んで臨床検査技師を目指した。当時の衛生技術学科は専門学校から改組して日が浅く、後日談によると先生方も手探り状態でいらしたようだが、専門教育のみならず社会人としての心得を厳しく教え込まれた。「健康管理も仕事のうち。風邪は欠席の理由になりません。」「同じ実習は2度とないので、実習の欠席＝不合格と思いなさい。」「物事を多角的に考えようとしないうあなた達のような人をゾウリムシと言うのです。」などなど。その結果、我が家の事情とも相まって「私には子育てしながら職業人としての責任を果たすのは無理。」という結論に至り、「30代前半は子育ての時期であって欲しい。」という願いを込めて書いたのが冒頭の寄せ書きである。

しかし現実かというと、化学系企業に入社して研究所の医薬研究部勤務となったことで、人生設計は大き

く変わった。配属の日に医薬研究部長より研究員名簿を受け取り、所内を案内していただいたときのカルチャーショックを今でも鮮明に覚えている。「ここでは給料分の働きはできない。道を誤った。」と、心底落ち込んだ後で「1年間は必死に頑張っ、それでもダメなら転職する」と決めた。働きとしては十分ではなかったと思うけれども、上司や先輩に助けて貰いながら仕事を続けることができ、仕事中心の生活は大学に移ってからも続いている。

独身の女性研究者という響きには、ドラマの主人公のようにスマートに、そしてバリバリと仕事をこなす印象があるかもしれないが、要領の悪い私にはそれは当てはまらない。その時々責任を果たすためには一つ一つを丁寧に積み重ねるしかなく、「ワークバランスは?」と言われれば、悪いほうの典型である。しかし、そのことよりも無理だと思った研究職を今日まで続けていることのほうが、私にとってはずっと大きい。

本稿の執筆はお世話になっている先生からお話をいただき、内容について深く考えないままにお受けして、「仕事と私事」というキーワードを含む正式な依頼文書を見て考えこんでしまった。私の経歴は研究者としては異質だし、ワークバランスも悪い見本以外の何者でもないからである。こんな私が何かを申し上げるとしたら、「物事を頭だけで考えて自分の可能性に蓋を閉めないでいただきたい」ということであろうか。たとえば、物事を進めるときに情報は必要であるが、時として邪魔になる。私が研究職に就いたとき、インターネットであらゆる情報を集めることができたなら、頑張る気にはなれなかったかもしれない。情報収集を不要とは言わないが、誤った内容や一方的な見方が含まれる可能性もあること、正しい内容であっても自分自身には当てはまらないケースが多々あることを踏まえて、翻弄されないことが肝要だと思う。過度の情報収集や他人との比較は止めて「違っていることの素晴らしさ」を認識し、個性を大切にしつつ生き甲斐をもって社会に貢献する道を目指そうではありませんか!!